

# 専攻共通特殊講義(情報技術) MOT科目

工学研究科 | 技術経営コース 博士課程前期

このプロジェクト科目は、工学研究科のMOTコース(技術経営コース)のために設置された専攻共通科目のひとつです。専攻共通特殊講義の中でも、この「情報」科目のみがPBL(プロジェクト型)を用いています。受講生は博士課程前期の院生です。この科目では、受講生

はグループに分かれ情報システムを企画して、これを「概念データモデリング」と呼ばれるモデリング手法で解析して、対象ビジネスの本質を抽出し、「あるべきビジネスの姿(TO BEモデル)」を共同作業の中で導きます。

## Report 01 >>> 情報システムを利用した新しいビジネスを考案 概念データモデリング手法を用いて分析

概念データモデリングは、NPO法人技術データ管理支援協会(MASP:Manufacturing Architecture for Series Products)が提案している、対象ビジネス(業務)の本質を取り出して図式化する手法です。主要なモデルは、「静的モデル」「動的モデル」「組織間連携モデル」の3つであり、これによって対象ビジネスの要(かなめ)の『もの』と『こと』を取り出して、あるべきビジネスの姿(TO BEモデル)を導出します。この概念データモデリングは、情報システムの設計のためだけに利用する手法ではありません。情報やものの流れが存在する業務であれば、どのような業務も分析対象となります。

このPBL型の講義では最初に、情報システムを利用した新しいビジ

ネスを各グループで考えます。2008年度は「京野菜の販売システム」を課題としました。この場合受講生は、自分で京野菜を勉強したり、京都の「錦市場」に行って京野菜の販売の様子を見学するなどして京野菜への興味を深めつつ、新しいビジネスを模索します。そして、概念データモデリング手法を用いて、自分達の提案した京野菜ビジネスを分析します。

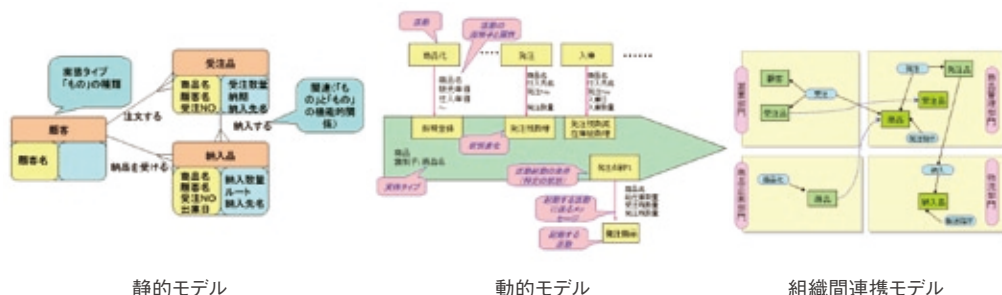
概念データモデリングでは、ソフトウェア工学で「オブジェクト指向」と呼ばれる手法を用いています。しかし、コンピュータやプログラミングに関する予備知識は一切不要であり、情報工学に対する経験が必ずしも多くない工学研究科の他専攻からでも気軽に受講できる形となっています。

## Report 02 >>> 静的モデル・動的モデルを組織間連携モデルに貼り付け、 あるべきビジネスの姿を導出

概念データモデリングは、中村 善太郎博士の提案による「要(かなめ)の『もの』と『こと』」の考え方に立脚しています。すなわち、効率の良い仕事のやり方とは、既存の仕事のやり方からムダを省くだけでは達成できないと中村博士は主張しています。本当にどうしてもやらなければならない、要(かなめ)の『もの』と『こと』があり、実際の業務は、

それに肉付けしてゆくべきであるとするものです。静的モデル・動的モデルは、この要(かなめ)の『もの』と『こと』を取り出す手段です。そして、それを組織間連携モデルに貼り付けることで、あるべきビジネスの姿を導出します。

- 静的モデル・動的モデル・組織間連携モデル(イメージ)



# Advanced Course of Infrastructure Engineering インターンシップ／ワークショップ

工学研究科 | 電気電子工学専攻 博士課程前期・後期

2007年7月新潟県中越沖地震が発生し、電力・水道・交通・通信などのライフラインが遮断され、地域の社会生活基盤は大混乱に陥り、地震・災害に強いインフラの構築が強く要求されるようになりました。文科省大学院教育支援プログラムとして本インフラGPプログラムが2007年9月からスタートし、2009年度までに文科省からの補助金により

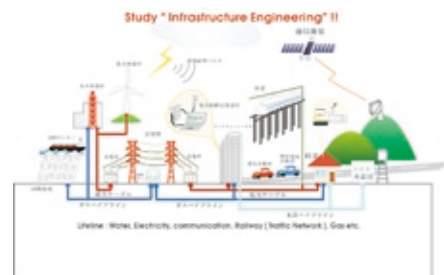
その立ち上げを完了させ、2010年度以降は大学運営に移行します。

本プログラムの中で最も重要であるライフラインに関する専門知識とそれら系統の基本理論を習得し、インフラの課題に対処できる、あるいは新しいインフラ技術を創出できるエキスパートを育成します。

## Report 01 >>> 2008年度から新規科目として本プログラムを設置 さらに、2009年度からインフラストラクチャー概論を新設

インフラGPの目玉となっているAdvanced Course of Infrastructure Engineering (ACIE)、インターンシップ、ワークショップは2008年度から新規科目として工学研究科に設置しました。また、大学院インフラGPへの進学を動機づけることを目的として2009年度から理工学部科目としてインフラストラクチャー概論を新設しました。

以下、ACIE、海外インターンシップ、学生国際会議について実施状況を紹介いたします。



## Report 02 >>> 学生に“学外でも活躍できる”自信を与え、勉学意欲の向上に繋げる、積極的な活動状況

ACIEでは、世界各国のインフラ(電力、通信、水道、ガス、交通、建築等)の実状について、海外からの教授陣がリレー形式で講義をします。講義(レポートを含む)はすべて英語です。2007~2008年度は13カ国(イラン、韓国、中国、イギリス、ポルトガル、カナダ、イタリア、スイス、オーストラリア、ポーランド、タイ、チェコ、オーストリア)から計15名の海外招聘教授が各国のインフラ実状を講義し、計30名の院生が各教授からGPA評点を受けました。2009年度は中国、エジプト、米国、タイ、インドのインフラについて16名が受講しています。

海外インターンシップでは、ACIE登録院生が4週間のインターンシップを海外の大学・企業等で実施し、滞在国のインフラストラクチャーについて調査すると共に、当該機関での教育・研究の在り方を体験し、その成果を報告します。2008年度までに20名の院生が海外インターンシップを経験し、非常に好評でした。宿泊費・航空券は1人40万円上限でGP補助金から支援しています。2010年以降は電気系学科から10万円が支援されます。

国際学生会議 (ISS) では、インフラストラクチャーに関連する学生会



議を本校の大学院生がホストとなり、企画・運営・実行します。2008年度は10月に京都で開催された高電圧工学国際会議 (IWHV2008) の一環として、海外3大学と国内4大学から選出された16名の学生委員がISSを開催し、研究機関の専門家が同席する中活発な発表・討論を行いました。2009年3月にはソウル大学に於いて合同学生会議を、更に6月には電力過渡現象国際会議 (IPST2009) の一環として、海外3大学と国内1大学によるISSを開催しました。

詳しくはインフラGPホームページ (<http://infraprg.doshisha.ac.jp/>) をご覧ください。

### 今後の予定

2010年4月からは、新たに設置した学部2年次課目「インフラストラクチャー概論」を核とする電気工学科インフラストラクチャーコースから、大学院 工学研究科 電気電子工学専攻への進学者を対象とし

てAdvanced Course of Infrastructure Engineering, Workshop および海外インターンシップを実施することでインフラGPの継続を予定しています。

# プロジェクト特別演習A・B

生命医科学研究科 | 生命医科学専攻

プロジェクト特別演習A 前期課程 プロジェクト特別演習B 後期課程

「プロジェクト」とは、明確な目的ならびにその達成時期を決めて遂行される一連の作業と定義されます。これからのわが国の中核を担う技術者には、プロジェクトをベースとした研究遂行の実践を経験させることが必須となります。また、プロジェクト実行には各人の自主・自立能力が要求され、これは現代では「プロデュース能力」として定義され

ます。本科目では、各自の研究課題が社会の流れの中でどのような位置付けにあるのかを俯瞰すると同時に、新たな技術創出の原点となる創造力を中心としたプロデュース能力を身につけさせ、自立した次世代を先導する中核技術者としての実践的手法の涵養を目指します。

## Report 01 >>> プロデュース能力に満ちた 技術者の育成を通じて人材から人財へ

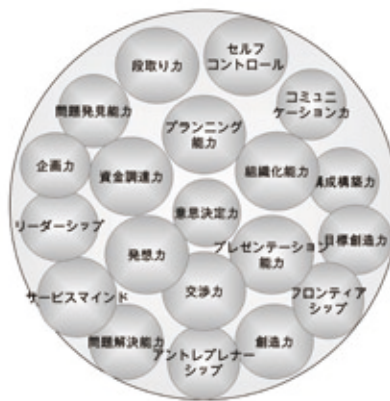
高度成長期におけるわが国の科学技術は、「アメリカに追いつき追い越せ」という明確な到達目標に向けて、いわゆる護送船団方式と呼ばれた産官の連携で生産技術を中心として大きく進展しました。結果としてこの展開は、壮大なプロデュースとしてのわが国の成功事例であり、この流れの中で、後に「プロジェクト」と呼ばれることになるさまざまな試みを各産業は無意識のうちにも展開しました。この内のいくつかは番組「プロジェクトX」として、失われた10年を経験した後に製作され大きな国民的共感を

得ることになります。この歴史事実を客観的に考えるならば、わが国の技術者の平均的性格として、適切な目標があり社会全体の流れの方向が揃っている場合には、各人相互の自律的補完作用が作用しチームとして新たな技術展開に大きな力を発揮することが分かります。この環境を実現するための個人が自立する基本OSとして、総合的人間力としてのプロデュース能力の習得を目指します。

## Report 02 >>> 自主・自立した技術者としての創造力ならびに精神力の涵養も目指す

指導教員から課題を与えられるという従来の研究指導手法に対して、研究遂行をプロジェクトと捉え、研究における課題設定の重要性を意識させることによって学生の自立性を向上させます。この展開によって、課題設定に加えて、実行、管理、成果評価等の一連の作業を学生が自ら行い、プロジェクトの遂行を通じて当該分野の技術の流れに対する幅広い視野の獲得を目指します。さらに、自らの頭で「考える」ことを基本とした指導を通じて、自主・自立した技術者としての創造力ならびに精神力の涵養も目指します。

• 総合的人間力としてのプロデュース能力



### 今後の予定

既に実行したプログラムにおいて、プロジェクト実行と管理に必要なさまざまな展開環境の実現を自らの責任で行うことを通じて、プロジェクト実施に対する現実の「壁」を履修者に体験させることができました。さらに、2回の報告会を実施し、この「壁」の克服過程を含めた自らの体験に対する考察を、本科目を担当する全教員の前で発表会を行い

ました。これらを経験させることによって、学生には成果に対して客観性を持った自己評価意識の芽生えを期待しています。

今後は、技術者として習得すべきもう一つの重要課題である自身をプロデュースする能力(セルフプロデュース)を通じて、目的課題である創造性の獲得をより明確に意識した履行プログラムの設定を目指します。



# 調査研究プロジェクト

総合政策科学研究科 | 公共政策コース／企業政策コース／国際政策コース

ヒューマン・セキュリティ研究コース／ソーシャル・イノベーション研究コース

本科目は、研究科所属の教員が遂行しているプロジェクトに受講生がスタッフとして参画し、そこで得た成果に対して単位認定するものとして、2002年度に開設されました。各科目とも平均で4から5名と少人数のチームで活動しており、受講生は、教員から与えられた課題や、

学生自らが設定したサブテーマに関して、各種の調査研究、文献・資料の収集、データ分析作業や現地での実習、報告書作成等の調査研究活動を共同で実施、展開することにより、その成果を各自の研究課題に活用することを目的としています。

## Report 01 >>> 集中講義形式により学内及び学外の施設において実施 クラスによって定期的にグループワークを遂行

講義は原則として集中講義形式により学内及び学外の施設において実施されていますが、定期的に教員、受講生が集まり、グループワークを遂行しているクラスも多くあります。各科目とも、春学期と秋学期に同一テーマで連続して開講され、1科目2単位、各年度6科目12単位まで履修することができます。2009年度は、公共政策、企業政策、ソーシャル・イノベーション(SI)研究の各分野で各学期に11の科目が開講されています。

• 2009年度春学期開講科目一覧

分野	科目名
公共	京滋地域における市町村合併後の現状に関する調査研究 京料理と土づくり 人間の安全保障のための法と政策 市町村合併の公共選択の視点による調査研究 社会福祉基礎構造改革下における社会福祉サービス提供の課題に関する調査
企業	ワーク・ファミリー・コンフリクトに関する組織心理学的研究 日本企業の役員報酬に関する研究 人的資源管理の現代的課題
SI	「子どもの居場所づくり」の実践的研究 クリエイティブ・コモンズ概念を用いた地域コミュニケーションデザイン研究 商業・観光・暮らしが共生するまちづくり・嵯峨・嵐山地域商業ビジョン策定

## Report 02 >>> 受講生の主体的な学習や活動を教員がサポートすることで プロジェクトの成果を各自の研究課題に活用することに寄与

2009年度の登録者は延べ数で94名(在学生の約3分の2に相当)に上っています。受講生の主体的な学習や活動を教員がサポート

することで、プロジェクトの成果を修士論文の作成に反映させるなど、各自の研究課題に活用することに寄与してきたといえます。

## Report 03 >>> Think Globally, Act Locallyに人間の安全保障を考える — 人間の安全保障のための法と政策プロジェクト —

共通テーマは「人間の安全保障」。公共、企業、国際、HS、ソーシャル・イノベーションの各コースに所属する多様な院生が集まっています。そのため、今年度の受講生のサブテーマは、保健医療と平和構築との係わり、少年補導とまちづくり、貧困削減とマイクロ・クレジット、児童虐待の防止、外国人留学生の就学支援と実に多岐にわたって

ます。文献の輪読と各自のサブテーマに関する研究実践報告をベースにしなが、ゲストスピーカーを招いたり、地域や海外に出向いてのフィールド・リサーチも活発に行っています。「人間の安全保障」をキーワードに、実務家や研究者との共同研究やワークショップも開催しています。

# フレッシュャーズキャンプ／函館キャンプ 京町家異世代協同プロジェクト

学生支援センター

学生支援センターでは課外活動支援を行っており、学生には各活動を通して「継続性を利用した人間的成長」、「帰属意識」、「自主性」、「集団性を利用した他者理解の促進」の育成を目指しています。

サークル等に加入していない学生個人に対しても、「学生個人の成長」、「他者との関係性」、「コミュニティの形成プロセスと展開」を意識したプログラムを提供しています。

## Report >>> 「教養型プログラム」「体験型プログラム」で 自己啓発のきっかけ、学生一人ひとりの成長に貢献

具体的には映画・音楽・演劇など文化的プログラムを学生と地域に提供する「教養型プログラム」と、学生が自主的に参加活動する「体験型プログラム」に分けることができます。「教養型プログラム」の具体例としては、著名人による講演会等の開催「アッセンブリーアワー」、「木曜日には何かがある!(What's on Thursdays!)」を合言葉に、開講期間中毎週木曜日、話題の映画上映を中心に、試写会やコンサートなど多彩なイベントを開催する「WOT」、DVD名画上演を地域にも公開し、地域住民のファンも多い「クローバーシアター」のほか、昼休み

の心とむむひとときに行われる「ランチタイム・コンサート」に人気があります。「教養型プログラム」に参加することで学生は、内発的成長も含め自己啓発のきっかけをつかむことができます。

また、学生が主体的に取組むPBL型活動としては、学生一人ひとりの成長に貢献できる「体験型プログラム」(フレッシュャーズキャンプ、函館キャンプ等)や「地域交流型プログラム」(京町家異世代協同プロジェクト等)があります。

### フレッシュャーズキャンプ(コミュニティ形成型)

毎年4月にびわこリゾートセンターにて合宿形式で開催しています。新入生が大学生活に慣れるよう、上級学年がプログラムを組み、キャンプにおける活動を支援します。参加学生はグループ毎に分かれて活動し、そのなかでコミュニケーションを深めています。



### 函館キャンプ(教養型・体験型)

創設者・新島 襄ゆかりの地でその生き方を学ぶことから自己を見つめるという趣旨のもとに、教職員4名が同行し5泊6日のキャンプを行います。参加者対象の説明会で目的を共有し、学生が主体的にキャンプのプログラムを決め、実施します。キャンプ経験者がアドバイスをし、自己理解から他者理解をするプロセスを共同生活の中で経験していきます。また、キャンプ中にイベントと振り返りを交互に盛り込むだけでなく、事前・事後・プログラム中のレポートのほか、「半年後の自分への手紙」を実際に半年後に郵送し、短期集中型の弱点を補う工夫もされています。夜行列車で函館を目指しますが、毎年、青森では卒業生から駅に停車する時間に合わせて差し入れがあります。函館山の山頂では函館クラブの卒業生との懇親会もあり、卒業後の継続的な交流の気風が参加メンバーにも引継がれています。



### 京町家異世代協同プロジェクト「地域コミュニティによる学生支援方策」(平成19年度学生支援GP採択事業)

今出川校地近くの商家(町家)の持つ文化的・歴史的な環境を学生の地域での活動拠点として活用しています。専従スタッフ4名が常駐し、学生スタッフ(20名)と子ども、地域の人たちと共に学ぶプロジェクトを企画・運営しています。地域の小学生が下校時に立ち寄って本を読んだり、スタッフと遊んでいます。他にも京都検定や読書会、京都の町家ならではの行事を開催し、地域への貢献度も高くなっています。今後は大学の持つ知的財産を一層有効活用することも可能です。



# ローム記念館プロジェクト

京田辺校地総務課 ローム記念館事務室 全学部・研究科(全学年)

2003年秋、京田辺キャンパスにローム株式会社からの寄付をもとに「同志社ローム記念館」が建てられました。この建物は学校法人同志社の共通施設で、同志社大学だけでなく、同志社女子大学、同志社国際中学校・高等学校をはじめとするオール同志社の学生・生徒が利用可能な情報教育施設となっています。同志社ローム記念館

プロジェクトは、この施設を活用したプロジェクト主義に基づくオンキャンパスの産官学地域連携教育で、次世代情報化社会を担う人材育成を目的としています。毎年、デジタルコンテンツに関連した10を越えるテーマのプロジェクトが2階に設置されたプロジェクトルームを拠点に、活動を行っています。

## Report 01 >>> 誘致プロジェクト・公募プロジェクト・コアプロジェクトで 様々なスキルの習得をはかる

同志社ローム記念館プロジェクトは、毎年4月～翌年3月の1年間を実施期間として行っている課外活動プログラムです。学生達は、企業・自治体からのテーマ提案による「誘致プロジェクト」、自らテーマを設定し、提案、実施する「公募プロジェクト」、プロジェクト活動のサポートを行う「コアプロジェクト」に参加。デジタルコンテンツの作成を中心としたプロジェクト活動を通じて、情報システムに関する知識をはじめ、スケジュール管理・コミュニケーション・プレゼンテーション能力など様々なスキルの習得をはかるとともに、正課授業では得られない貴重な体験をすることができます。プロジェクトには年間3回の報告会が課せられており、そのうち、秋に行われる中間報告会、3月に開催される最終成果報告会での報告と活動状況に対して、同志社の教員で構成される委員が評価を行います。「活動」、「成果」、「人材育成」の3つの指標をもとに評価し、最も優れたプロジェクトには「同志社ローム記念館

### 年間スケジュール

- 4月・プロジェクトスタート
- 5月・キックオフミーティング
- 6月・スタートアップ報告会
- 8月・ステップアップキャンプ
- 9月・中間報告会
- 11月・同志社京田辺祭への出展
- 3月・最終成果報告会  
同志社ローム記念館大賞発表会

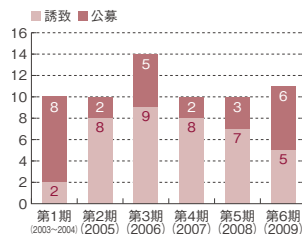


大賞」を授与します。1年間の活動を充実したものにするため、5月にはキックオフミーティング、夏にはステップアップキャンプなどを開催し、参加メンバーのモチベーションの維持向上をはかっています。

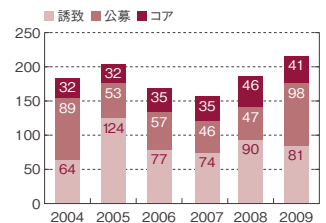
## Report 02 >>> プロジェクト活動の成果やアイデアが社会へ還元 2009年度の参加者数も220名に増加した

プロジェクト活動によって産み出された活動・成果は、企業や自治体などで活かされており、新聞や雑誌等メディアにも取り上げられるなど、その活動・成果やアイデアが社会へ還元されています。また、参加したメンバーへのアンケート調査結果では、「社会と自分との関係に対する意識」、「スキル向上」、「弱点の発見と克服、強みの強化による自己の確立」の項目をはじめ、非常に高い評価を得ており、2009年度も220名の学生・生徒が参加し、日々活動を行っています。

### プロジェクト採択数の推移



### プロジェクト参加者数の推移



### 今後の予定

今後も、社会性豊かな成果を創出するとともに、社会に有益な人材を輩出していきます。また、より高い教育効果をあげるため、プロジェクト活動に

必要な知識・スキル習得のためのキャンプやセミナー等の実施をはじめ、サポート施策の充実・外部評価の導入をはかっていく予定です。





全学共通教養教育科目  
プロジェクト科目  
検討部会 部長  
※2006年度 全学共通教養教育科目 プロジェクト科目 科目代表を務める

## 山田 和人

### 学びの原点・プロジェクト学習の教育効果

高等教育においても、「わかる」から「できる」への学びのパラダイム転換が必要な時代を迎えている。それはいかにして可能であるのか。そのためには、自ら情熱をもって取り組むことができる課題を発見して、それに意欲的に取り組み、試行錯誤を繰り返しながら、問題解決の糸口を自分自身でつかんでいく以外にはない。それは、知識や技術を効率的に習得していく態度とは対照的であり、あえて言えば、非効率的な学びへの転換とも言える。現場で本物に触れながら、かけがえない人やものに出会うことによって、それを自分の愛着の対象として、そこにある現代社会の抱える問題と真っ正面から取り組んでいける洞察力と察知力を備えた人材を育成していくことが大切であり、その意味でプロジェクト学習は、実践知と暗黙知を掘り起こしていく行為とも言える。自ら発見した課題を解決するために、現場で調査し、思考し、解決の糸口を見つけていくことができるようになるのは、プロジェクト学習のダイナミズムであり、チームを自分達で作上げていくことを通して、メンバー同士の信頼と期待、励ましと癒しが活力となって、プロジェクトの達成感を際立ったものに変えていく。学生自身が自分達でモチベーションを上げていくための工夫を試み、チームワークで困難な問題に立ち向かっていく前向きな姿勢を獲得していくことができる。しかも、プロジェクトの遂行の過程で実感する、自ずと意志的に決定されていく役割を担う喜び、お互いに意見を交換していける楽しさが、彼らのモチベーションを自然に引き上げていく。彼らの実践活動こそが新しい時代への提言であり、豊かな未来に向かっての学びとなり得る。それは、いわば教科書のない学習であり、マニュアルのない学びへと自らを変革していく大きな学びのパラダイム転換となっていると言える。プロジェクトは、学生の元来備えている「研究力(知りたい)」、「教育力(教えたい・学び合いたい)」、「社会力(役に立ちたい)」を引き出していく教育力を内在させていると言える。それを学生自身が実感できることが、プロジェクト学習の一番の魅力であろう。今後の彼らの活動におおいに期待したい。共に学ぶ喜びの獲得こそ、高等教育機関における学びの原点と言えるだろう。



文学部 国文学科  
4回生

## 竹澤 啓二

### 多くの人との出会いや交流によって、生きた学びを実感できた

全学共通教養教育センター | プロジェクト科目 「演劇で地域子ども達と学ぶ」企画実践プロジェクト (正課科目)

「プロジェクト」×「科目」=…一体どんな授業なのだろう、そう思って履修したのが1回生の秋学期でした。それから毎年プロジェクト科目を履修しています。

この科目は、一般的な座学の講義とは異なり、テーマに基づいて学生自らが企画・推進していかなければ授業は進みません。そのために、授業時間外もチームで集まって必死に話し合い、時には徹夜で会議をすることもありました。しかし企業、お店、学校などと交渉して企画を実施するなど、実際に社会の中で活動することで、たくさんの人と出会い、多くのことを学ぶことができました。また逆に、自分たちのテーマを深掘するために文献や資料を調べたり、著名な方にゲストスピーカーの依頼や取材をして知識を習得し、それをまた実践で生かすという、まさに生きた学びを実感する科目でもあります。

もちろん全てがうまくいくわけではありません。学部学年、目標、モチベーションも異なる人が集まるわけですから、チームを作っていくことは容易ではありません。しかしその中で苦難や喜びを共にした仲間は一生の宝物となっていますし、そういった仲間との出会いこそが、私達を一番成長させてくれると私は思っています。



経済学部  
4回生

## 石原 幸奈

### 活動の進行や成果のまために苦心したことが成長につながった

経済学部 | 経済学科 学生ケータイレポート (課外活動)

私たちゼミでは、「企業価値を高める経営とは」をテーマにしました。京都の企業のHPを学生視点で評価したり、実際に企業の方に協力していただいたりして、何が企業価値に結びつくのかを考えていきました。大学外の方に多く深く接する中で、社会で働く人々は、学生が思っているよりも精神的なことを重視している、企業は人が集まってできていると感じました。帝国データバンクの方にコミュニケーション力を向上させるワークショップを何度も開いてもらったことも、とてもためになりました。

普通の授業では、何をすべきかが明確で、「今日はここからここまで」のスタイルが多いのですが、プロジェクトは、何をやったらいいか、何をすればプロジェクト達成となるかわからないものでした。できたと思えばやり直し、進んだと思えば振り出しに戻る、を繰り返しました。ですが最終的に成果を発表しなければならない期限はやってきます。メンバーそれぞれ時間がない中、完璧でないながらも、期限内に何かしらのものを作り上げるよう奮闘しました。あれをやってみたりこれをやってみたりしながらも、常に「どうすればいいんだ」と頭をかかえていましたが、そういう思いを味わったことでひとつ成長できたと、今になって思います。



工学部  
情報システムデザイン学科  
3回生

## 野村 聡太郎

### グループ活動で得た刺激が、自分自身を見直すきっかけとなった

京田辺校地総務課 ローム記念館事務室 ローム記念館プロジェクト「ゲームソフトの評価とニーズを探る」(課外活動)

私は、コミュニケーション能力やプレゼン能力の向上、普段の講義とは違ったより実践的なことにチャレンジしたいと思いプロジェクト活動に参加しました。

私達のプロジェクトでは、ゲームを評価するためのアンケートを作成したり、ゲームの企画・開発など様々な側面でゲームを捉え、ニーズを探っていく活動をしています。アンケート作成の場面では、個々のニーズに対する認識のずれからなかなか意見がまとまらなかったり、ミーティングに参加できなかった人との情報共有ができていなかったり、開発の場面では個々のモチベーションやプログラミング能力に大きく差があり、うまくいくことよりも何かにつまずくことが多く、集団で一つの目標に向かって成果を出すことの難しさを実感しています。しかし、そういった活動の中で得るものは多く、他のメンバーとコミュニケーションをとり一緒に活動していくことで、そこから刺激をもらい、今の自分に足りない所や、自分にしかない所を新たに発見することができ、自分自身を見つめ直す非常に良い機会だと思っています。

これまでのプロジェクト活動を通して経験したこと、学んだことを残りのプロジェクト期間で生かし、またそこから得られるものを今後の自分の糧にしていきたいと思っています。

## ▼ 同志社大学

[発行] 同志社大学 教育支援機構

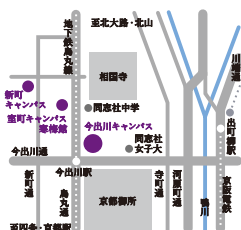
〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入

TEL : 075-251-3204 FAX : 075-251-3064

E-mail : ji-pbl@mail.doshisha.ac.jp

### 今出川校地

- 地下鉄「今出川」駅下車、徒歩1分
- 京阪「出町柳」駅下車、徒歩15分



### 京田辺校地

- 近鉄「興戸」駅下車、徒歩15分
- 近鉄「新田辺」駅下車、バス8分
- 近鉄「三山木」駅下車、バス5分
- JR「同志社前」駅下車、徒歩10分

